

## 校庭整備計画における彫像の説明

甲陵高校の教育理念は、ソクラテス、プラトン、アリストテレスを中心とした古代ギリシャ哲学を源とする、理性によって真理を探究する合理主義の崇高な精神に発するものです。

本校は、プラトンの学園「*AKAΔHMEIA*」(アカデメイア)の教育精神に鑑み、高い志を立て切磋琢磨し、お互いを高め合う学園です。(校訓の「立志躬行」は、この意味を含んでいます。)



施設・設備費等に当てる一般財源とは別に、卒業記念代を予算立てし、昭和61年度より現在に至るまで、卒業記念継続事業として「校庭整備」を進めてきました。その一環として、上記三大哲人の広く



深い知性を象徴する像や、ディオゲネスとアレクサンドロス(酒樽の傍らに腰下ろす偉人と、大王)の故事にちなみ、高い徳性を表現した像などが製作されてきました。甲陵生がこれらを、仰ぎながら人格の完成を目指し、限りなく成長を遂げてくれることを祈っている親、教師、先輩、その他多くの関係される方々の思いが込められているのです。

現在もなお、この校庭整備計画は、崇高な精神を持つ甲陵生を育てる教育環境整備事業と位置づけられ、今に引き継がれております。

本校ご来校の際には、ぜひご覧下さい。



現在ある像の一部について、河西先生(世界史)が記された説明を示します。

### 『ディオゲネスとアレクサンドロス(アレクサンダー)大王』

ディオゲネスは前4世紀のギリシア、アテネの哲学者。「樽(たる)の中を住みかとし、犬のように暮らしていた」ということで「犬儒派(キニーク)」の祖と呼ばれる。

この彫像は、かの有名なアレクサンドロス大王がアテネの町を訪れた際、昼寝をしていたディオゲネスに対し「何でも望みをかなえてやろう」と言ったが、ディオゲネスはこれに「あなたの身体が日光をさえぎっているので、そこをどいて欲しい」と答えた。



「無礼者」と怒る家来をおしとどめたアレクサンドロスは「私はアレクサンドロスでなければ、ディオゲネスになりたい」と言ったというエピソードに基づくものである。

この世の名誉・富などを一切問題にせず、思うがままに生きたディオゲネスを「世界の帝王」もうらやましく思ったということであろうか。

### 『天宇受売命(アマノウズメノミコト)』

アマノウズメは日本神話における天上界である高天原(たかまがはら、あるいは、たかあまはら)に住んでいた女神である。

高天原の最高神である太陽の女神、天照大神(アマテラスオオミカミ)が弟のスサノオの命の暴虐なふるまいに傷つき、怒り、天の岩戸(あまのいわと)に閉じこもってしまい、世界が真っ暗になってしまった時、困り果てた神々はアマテラスに天の岩戸から出てきてもらうための計略をねった。そして知恵の神であるオモイカネ神の策に従い、神々は天の岩戸の前で宴会を行った。

その際、アマノウズメは樽の上に乗って踊りをおどり、これに神々は大笑いして拍手喝采した。岩戸の中にいたアマテラスはこれを不審に思い、「私がいなくなって暗黒の世になってしまっているのに、なぜ、お前たちはそんなに喜んでいるのか？」とたずねた。するとアマノウズメは、「アマテラス様よりもすばらしい神様がいらっしゃったので、皆でお祝いしているのです」と答えた。すると動揺したアマテラスは、その神を見ようとして岩戸の戸を少し開けた。すると岩戸の入口にはオモイカネ神の計略により鏡(銅鏡)がかかっており、そこにアマテラスの姿が写った。アマテラスがもっとよく見ようと岩戸から身を乗り出すと、そこに待ちかまえていた怪力の神タヂカラオの命がアマテラスの腕をつかんで外に引っ張り出し、この世に再び光が戻った。

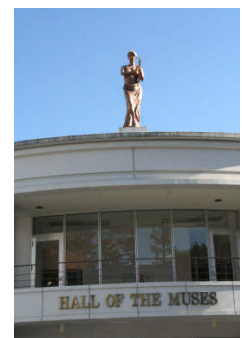
これが有名な「天の岩戸」のエピソードであるが、彫像はこの岩戸の前でおどるアマノウズメをイメージしたものである。



### 『ミューズ』

ギリシア神話の、詩歌、文芸、音楽、舞踊、学問の女神たちをいう。「ミューズ」とは英語名であり、ギリシア語では「ムーサ」という。人数については伝承によって異なっているが、一般的には神々の王ゼウスと記憶の女神ムネモシュネの間に生まれた9人の女神とされる。

神話の中では、太陽と音楽の神として有名なアポロンと、サテュロス(ギリシア神話に出てくる半獣半人)の笛の名手マルシュアスの音楽競技



の審判役をつとめたことで有名(ちなみに敗れたマルシュアスは「神に挑戦した身の程知らず」として、アポロンから残酷きわまる仕打ちを受けた)。ちなみに9人の内訳は、叙事詩の女神カリオペ、歴史の女神クレイオ、抒情詩の女神エウテルペ、喜劇の女神タレイア、悲劇の女神メルポメネ、合唱と歌舞の女神テルプシコレ、独唱歌の女神エラト、神々をたたえる賛歌の女神ポリュヒュムニア、天文の女神ウラニアである。